

令和元年度緑のボランティア活動に関する

指導者育成委員会（第2回）

議事録

○松岡緑環境課長 それでは、定刻になりましたので、これより令和元年度第2回「緑のボランティア活動に関する指導者育成委員会」を開催いたします。

本日は、年始の御多忙のところお集まりいただきまして、まことにありがとうございます。

本日は5名の委員の皆様にご出席いただきありがとうございます。

改めまして、委員の先生方を御紹介いたします。お手元の資料の委員名簿をごらんください。

上から読み上げさせていただきます。

一般財団法人セブン・イレブン記念財団地域活動支援事業マネジャーの小野委員でございます。

国際環境NGO FoE Japan総務部部長・理事の篠原委員でございます。

公益財団法人日本自然保護協会自然保護部市民活動推進室室長の高川委員でございます。

特定非営利活動法人自然環境アカデミー専務理事・事務局長の野村委員でございます。

明星大学理工学部総合理工学科助教の柳川委員でございます。

事務局からは私、緑環境課長の松岡、保全担当課長代理の平野、保全担当主事の桐山の3名が出席いたします。どうぞよろしく願いいたします。

続きまして、座長選任に移らせていただきます。

この委員会は毎回、座長を互選で決めることになってございまして、座長をお引き受けいただける委員の方はいらっしゃいますでしょうか。

それでは、事務局からの提案でございますけれども、前回に引き続き野村委員に座長をお願いしたいと考えてございますが、皆様いかがでしょうか。

（「異議なし」と声あり）

○松岡緑環境課長 ありがとうございます。

それでは、座長を野村委員をお願いいたします。

（野村委員、座長席へ移動）

○野村座長 改めまして、座長を引き受けさせていただきます野村です。どうぞよろしく願いいたします。

早速、議事に入ってよろしいですか。

○松岡緑環境課長 野村座長のほうで、議事進行についてよろしく願いいたします。

○野村座長 7月に引き続き、座長という大役ですが、皆さんからの意見をたくさん出していただきたいと思っております。

よろしく願いいたします。

本日の内容としては、3つあるということです。

「指導者育成講座 今後の方針について」、「令和2年度の基礎講習」の具体的な内容について、それから「広報活動について」です。

まず、「指導者育成講座 今後の方針」について、議論をしていきたいと思っております。この件について、事務局より御説明をお願いいたします。

○事務局 指導者育成講座の今後の方針について、説明申し上げます。

資料1をお開きください。

前回の委員会にて、委員の皆様方から講座の狙いの明確化についての御意見を多くいただきましたので、そのあたりを再度、説明申し上げます。

指導者育成講座は、自然保護条例を根拠に行われている講座です。条例には、普及啓発、技術指導等を行う指導者を育成するとあり、講座開始当初は、いわゆる現場指導者の育成を想定して始めたものになっております。

東京都が望んでいた育成の成果を、図で示させていただきました。

まず、【パターンA】。

ボランティア団体の構成員が、当講座で技術的な知識を習得し、他の団体構成員に対し技術指導を行うことができるようになることを目指した図になっております。この能力については、主に専門講習の「緑地保全活動コース」で養うものとしておりました。

続いて、【パターンB】をごらんください。

こちらは、ボランティア団体の構成員が、ボランティア初心者や一般都民に向けて、活動の普及啓発と簡単な技術指導を行うことができるようになることを目指した図です。こちらの能力は、主に「自然観察・体験活動コース」にて養うものとしておりました。

これら現場指導者の育成を目指していた背景には、都民による緑のボランティア活動者数が増加傾向にあったことがあります。そのため、東京都は団体そのものの運営強化よりも、ボランティア個々の能力強化と、新規ボランティアへの指導を行うことができる人材育成に焦点を当てていたということになります。

しかし、その後ボランティア活動者数を追っていきますと、徐々に減少していくことになります。表は、総務省が統計しているボランティア活動の種類別行動者率になります。

平成13年は自然、環境分野のボランティア行動者率が5.7%であったのに対し、平成28年は半減する結果となってしまいました。

そこで東京都は、指導者の育成とは別にボランティア人材の掘り起こしを始めることになります。その取り組みの一つが、「里山へGO!」です。平成27年度から、保全地域で自然体験活動を企画、運営を始め、その参加者数は順当に増加してまいりました。

ボランティア人材の裾野を広げるという意味で、一定の効果を得られるようになってきたと感じております。

次のページをごらんください。

こういった状況を踏まえながら、指導者育成講座の方針を新たに定めさせていただきました。

それは、いままでの現場指導力を養う内容に加えて、団体運営力を身につけるための講座内容に発展させていくということです。これまでの講座受講者は、やはり現場指導力の向上を期待して受講する方が多かったのですが、ボランティア団体の縮小を防ぐためにも、団体運営力を身につけた人材を育成していきたいという期待が東京都にはあります。

また、「里山へGO!」に参加する方々は、現在ボランティア団体の中で活動している方々と世代も違う人も多くいます。「里山へGO!」でボランティアの裾野が広がりつつあるので、「里山へGO!」の参加者の中からも、団体運営という面での指導者になる素養のある人材を見つけたいと考えております。

講座の構成案を示させていただきます。現在は基礎講習の受講後、専門講習受講という流れで、専門は2コースあります。前回の委員会で現場指導と団体運営の能力は別だという御意見をいただきましたので、団体運営力の強化のために今後の方針を3案示させていただきました。

基礎講習については、指導者講座の入門で基礎を受けないと専門を受講できないため、構成はこれまでと大きく変えず、団体運営科目の強化は専門講習より導入していくこととしています。

団体運営を担う人材と、現場指導を担う人材は別であるとの御意見もありましたが、過去には当講座に現場指導力の向上を求めて受講した方が、結果、団体運営に興味を持ち団体を立ち上げたという方もいらっしゃいましたので、案2や案3のように現場指導と団体運営をはっきり分けるよりは、案1のようにオプションとして団体運営力の向上科目を追加するところから始めていきたいと考えております。

次のページをごらんください。団体運営力向上科目の効果になります。

当講座の受講生が、現在所属している団体の強化や、新規団体の立ち上げにかかわってい

けるようになることを期待しております。

きょうの委員会では、この次の議題で基礎講習の具体的な内容で御意見をいただくことになり、また専門講習の具体的な内容は次年度の委員会で御意見いただく予定です。ここでは、講座の大枠について御意見いただければと思っております。

また、参考に2点お示しさせていただきます。

まず、東京都の取り組みとして次年度から、「保全地域サポーター制度の導入」を検討しております。これは、「里山へGO!」などの活動のリピーターを対象にした制度で、サポーターとして登録することで、団体に属することなく「里山へGO!」の運営や、団体の定例活動に参加できるようにするという制度です。ボランティアの参加形態の多様化に対応するための取組です。

参考2に、指導者育成講座と、サポーター制度のターゲット層を示させていただきました。サポーターのターゲットは主として30代から50代と少し若い層、指導者育成講座の受講生のメインターゲットは現時点で団体に属している層のうち比較的若い40代から60代前半の層としておりますが、サポーター制度のターゲット層の中にも指導者の素養のある人材もいるはずなので、あわせて広報していければと考えております。

以上が、「指導者育成講座 今後の方針」に関する説明となります。

○野村座長 ありがとうございます。

今回のところでは、今後の方針とともに、2ページ目のどのような形で基礎講習をやった後にステップアップをしていくかを主に、ここでお話をすればいいということですね。

2ページ目の資料を見ていただくと現行の形、それから案1、案2、案3という感じが出ていますけれども、今までにはなかった団体運営力向上を科目として入れていったほうがいいのではないか、その入れ方をどういうふうにしていきたいと思いますかということですね。

それでは、まずこの時点で御意見、御質問がある方がいらっしゃいましたら、いかがでしょうか。

○柳川委員 案1が一番お薦めと御説明いただいたかと思うのですが、その理由をもう一度お願いします。

○事務局 例えば案2ですと、完全に専門講習から技術指導に特化しているコースと、団体運営に特化しているコースと入り口が分かれてしまっているのが、現場指導力コースに進んだ人に関しては、団体運営のコースは全く受けられないような道になってしまっています。現行の講座の中で、全く団体運営に関する講義がないわけではなくて、ところどころには入

っているのですけれども、そういったコースを受講する中で、もともとは現場指導力の特化というところで受講を決めた方が、団体運営に興味を持つようになって団体を立ち上げたという方もいらっしゃったので、ここのコースを完全に切り分けてしまうと、それぞれの科目を受けることができなくなってしまう。団体運営のコースに関しては、興味がある方がプラスのオプションでとったり、追加で必須という形で、今あるコースにプラスアルファとして乗せていくほうがいいのではないかなというところで、案1が今のところ、私たちが考えている中で一番有力な候補となっております。

○柳川委員 ありがとうございます。

○小野委員 推奨ということですね。

団体の運営力は何を指すのかの部分重要だと思うのですね。

実は、うちも助成金制度があって、助成金の募集時期に助成金セミナーをやっているのですけれども、こういううちの募金のお金を使った助成金がありますよと、そういうものでセミナーをやっているのですが、単なる制度の説明ではなく、今私が助成金の書き方講座をやっているのですよ。理由が何かというと、皆さんと一致しているかどうかはわかりませんが、今、うちの財団に申請で来ている団体で二極化になっているかなという感じがするのですね。

理由が何かというと、団体としてボランティアの延長線上でやっている、ちょっと自分たちのやりたいことをやっているような団体と、社会を変えたいと思ってやっている、本当にNPO法人でやっている、篠原さんのところなどはそうだと思うのですけれども、そういうところと結構二極化になっているのですね。

環境局さんと一緒にやっている、高尾の森自然学校にもボランティアの人がくるのですが、例を言えば、要するにただ楽しくやりたいんだという感じでボランティアに来られる人と、スキルを高めたいと思って来られている方の二極化になっているのです。

私は、今の推奨の部分では、基本の講座があったとして、団体の運営能力がどこまで問われるかもあると思うのですけれども、マネジメント力は多分、プラスアルファで必須にしてしまって追いついてこれなくなってしまうのも、私はちょっと心配なのかなと思ったのですね。

さっきの団体運営力という、何が団体運営力の定義なのかなと思ったのですけれども、ただ単にボランティアの人のシフトを考えると、安全工程だけなのか、それとも資金調達も含めた会員とか会費収入とか、NPOだったら理事会をどうやって運営するかなどというよう

な専門的などころまで入り込んでやるのか、そこの定義だけでもわかればなと思ったのです。

何かイメージしているものはあるのですか。なかったらなかったで、いいのです。

正直に言ってしまうと、私が地域でいろいろなNPOを見ている中で、団体を立ち上げるのはいいのですが、結局一番困っているのは資金なのです。会員はいない、参加者も集まらない、それこそ会費収入もなくて、自分たちの手持ちでやっている。そういうボランティアとか団体をつくるという考えならば、運営能力は切ってしまうでもいいと思うのです。

だけれども、継続して、それこそサステナブルな団体にしていくことを考えると、やはり運営は切り離せないし、だけれども興味を持っている人と持っていない人は結構二極化になっている。

今、話したように、そういう観点も含めてやっていかないと、持続可能な活動はなかなか難しいのかなと。

皆さんも御存じかどうかかわからないですけども、できてきている団体はあるのですが、消えていく団体も結構あるのです。だから、消えていかないように活動してもらうようなところまで手を伸ばすのかどうなのかというところが、私もその団体運営力はどこまで問われるのかなと思ったのです。

○松岡緑環境課長 資料1③で、今、見ていただいた次のページをごらんいただければと思うのですが、そこに【パターンC】と【パターンD】という図面があり、緑色の枠で「フィールド」と書いてあります。

イメージとして、このフィールドを保全地域と思っていただいていたいいのですが、その中で、丸に「指」と書いてあるのは指導者で、「員」というのは構成員を指しているのですが、【パターンC】は既にその指導者の方が団体運営力を向上して、組織を今より強固なものにしていくパターンと、【パターンD】のようにもともと団体が今ないところに指導者の方が入って行って、ボランティアを団体の構成員にして団体をつくり上げていくと、我々としては両方のイメージを持って考えているところなのですね。

今、先生のおっしゃったように、最初に立ち上げるところもそうですけれども、立ち上がったものを継続していくというCのようなことももちろんあるかなと思いますので、両方のイメージを持っているところでございます。

○小野委員 わかりました。

○野村座長 どうぞ。

○柳川委員 先ほど、小野先生がおっしゃったのは、どこに焦点を当てるかによって、お伝

えしなければならぬ内容が変わってきて、割かなければならぬ時間も変わってきたりするというお話なのですか。

○小野委員 まずは今、入り口の部分で、ここの判断は案1にするのか、案2か案3かというところだと思うのですけれども、私は案1でもいいのではないかなと思うのです。

だけれども、その案1の団体運営能力って何を問われるのか、その部分のところは今あったように、団体を立ち上げる部分から運営も全て含めてだというのは、私が今さっき言ったようなお金の資金調達も含めて、全てをコントロールではないですけれども、後ろでマネジメントできるような講座をつくるというイメージを私は思ったのですけれどもね。

○柳川委員 ありがとうございます。

○事務局 講座の具体的な内容は、まだ内部でも詰められてはいないのですけれども、基礎講習の中でお金のやりくりの仕方などに触れているような講座があつて、ただ具体的な手法までは説明する講座になっていないので、助成金の使い方を基礎で簡単に触れた上で、具体的に助成金をどうやって使っていくのがいいのかというような、もうちょっと踏み込んだ講座を専門に入れるとか、そういったところも話はしていたのです。

そうなっていくと、今、現場で問伐したいとか草刈りしたいという思いで来ている受講生たちがあまり講座を受けたくないとか、そういうのは興味がないなというほうに傾いていってしまうという意見もあつて、そのバランスが難しいなと考えております。

助成金ですとか、やはり団体がずっと続いていくということを考えてとき、人集めなど、そういったところがすごく重要だと思うので。

○小野委員 広報とかですね。

○事務局 はい、そうですね。

そういったところが、団体運営力として身につけてほしい力だと思っております。

○小野委員 わかりました。

○野村座長 先に高川さん、どうぞ。

○高川委員 私も、案1に賛成なのですけれども。

前回の委員会でも、広報の話とか、ペルソナを決めた方がいいよねという話は結構しましたし、団体運営力は重要だという話になったと思うのですけれども、このカリキュラムに入れようという話にまでなったのでしたか。

○事務局 団体運営を担っていく人材と現場指導をやっているというのが役割分担として別々だったりするので、1つの講座で一遍に両方を身につけさせるというのはなかなか難し

いのではないかという御意見もあったので、そこを解消するのに一番いい方法としては、分けてしまって、団体運営を目指している人はそのコース、技術指導をやっていききたいという人用の別のコースというところも考えたのです。

○高川委員 分けて入れるのは大賛成で、案2よりは絶対に、小野さんが言われたとおり、二極化というのものもあるし、オプションで入れた方がいいと思うのですね。

ただ、この団体運営力向上科目をそもそも入れるという話になると、何が足りていないか、今ボランティアがなぜ維持できないかという課題のもとに設定することになるので、その作業が絶対に必要だと思うのです。そこがないまま議論をすると、結構これは本当に難しい。私たちNPOも四苦八苦している難しいところなので、とても難しい議題になります。

整理されているものもいろいろあるとは思いますが、現状こうだからこういうカリキュラムをつくりますという整理をしないと、多分ちぐはぐになってしまうかなと思います。

例えば、資金獲得、ファンドレイズの力が足りないとかもそうですし、そのために組織のミッションとかゴールを描くところも足りないし、そもそもそういう価値観を共有する、単なるサークルではなくてチームにするチームビルドの力も必要だし、こちらはもう技術的なところですが、広報とか会計とかも足りないところもあると思うのです。

もう少しだけしゃべらせてほしいのですが、そう考えると例えば、もう趣味の団体で終わっていいんだという組織がふえているから新しい世代交代ができないとか、場合によっては、自分たちの縄張りだからもうほかに入ってきてほしくないというような、結構ネガティブなマインドセット、意識が障壁だったりするかもしれないので、そういう障壁をこれにうまく入れられるのかということと、人材育成だけで果たして解決できるのか。自分のところ以外は入ってほしくないみたいなものは、多分リーダーを人材育成しても解決できないと思うので、そのあたりの切り分けも必要かなと思います。

ただ、個人的にはこれをオプションで入れることにはとても賛成ですが、ボリュームがふえちゃうと大変だと思うので。

○小野委員 そうですね。オプションのボリュームがわからないのです。

○高川委員 大変なので、やはり今やっているところをスリム化したり削ってやるということ、どうしてもセットにしたほうがいいかなと。

この事業の予算がふえれば、つけ足しもありだと思いますけれども。ちょっとそのあたりは確認ですけれども。

○松岡緑環境課長 専門講座の具体的なメニューにつきましては、来年度が基礎講座で再来年度専門講座にしています。また来年度、1年かかって、この委員会の中で具体的に御議論いただければと思っているのですけれども、きょうのところは、方向感としてどういう方向がよりいいかなということで、今、高川先生におっしゃっていただいたような御意見をいただければ、我々も少し考えて、来年度の議論に生かしていきたいなと思っているところがございます。

○高川委員 わかりました。

○野村座長 では、篠原さん。

○篠原委員 大分、高川さんと重なってしまっただけなのでは、私も案1から3で言えば案1で、必須よりはオプションなのかなという気がしています。

あとは、今までやっていた、現行のコースの中に運営力に分類されるようなものも講座の中であるのかなと。マーケティング、広報とかが入っていたので、そういうものを切り分けてという意味で、完全に追加の項目になるのではないのかなと思いました。

基礎と専門講習の共通科目で、ざくっと全体はあるのですね。その中でより深く知りたい人のためのオプションという形に設定するのがいいのかなと。

いずれにしても、受ける対象の団体がどういう現状にあって、どういう運営力を必要としているかという分析はしたほうがいいなと思っているのと、あとは中身になってしまうのですけれども、そもそも自分の団体がどこが悪くてどういう状態で、ほかの団体と比べて今の段階にあるのかがわかってない人が多いです。

○小野委員 確かにそうですね。

○篠原委員 結構、殻にこもってしまっていて、「うちはこのやり方でずっとやってきた」みたいな感じなので、ほかでうまくやっている情報などを入れることと、自分の団体の現状を知るのには、基礎なり専門なりどこかの段階でちゃんと現状把握をさせてあげないと、どこに向かっていいのかがそもそもわかっていない。自分は何を受けべきなのかが、わからないのではないかなという気がしました。

あと一つ質問をしたかったのが、保全地域サポーター制度を来年入れるのは決定なのか。

○松岡緑環境課長 予定では。

○篠原委員 難しそうだなと思って。

○野村座長 それはもう、来年度から始めようということですか。

○高川委員 「里山へGO!」と一緒に事業ということですか。

○松岡緑環境課長 「里山へGO!」にいらっしゃっている方で、リピーターの方が何人もいらっしゃるかと思うので、そういう方を対象にもうちょっと深く、「里山へGO!」よりもさらに中に入り込んでいきたいという方を育てていくということで、サポートレンジャーのようなものをイメージしているのです。

○篠原委員 東京都が斡旋して団体に派遣するみたいなイメージですか。

○事務局 そのやり方はこれからまた考え、なるべく円滑に進むやり方を検討していきたいです。

○篠原委員 団体内でも参加者の扱いは、本当に会員だけでやっているところもあるし、自由に外部から募集してやっている団体もあるので、それによって受け入れの仕方が変わってくるなと思います。

○事務局 そうですね。

○小野委員 そうなのですよ。

登録して、希望があって、そことマッチングって、結構大変です。

○篠原委員 そこはどんな制度なのかなと思ったのです。

ありがとうございました。

○小野委員 「里山へGO!」は、うちの高尾の森自然学校も載せさせていただいていますが、非常に効果が高いです。ものすごく高いです。全体の中の2割か、3割まではいかないかな、20%くらいの新規率はここから入ってきています。

○篠原委員 常連に、リピーターになっている人もいますか。

○小野委員 常連になっている人も中にはいますが、リピーター率は1割あるかないかぐらいです。

○篠原委員 リポートしてくれるのはうれしいです。

○小野委員 新規で来てもらう、間口を広げるという意味ではすごく効果があるのではないかなと思います。

○柳川委員 一つだけ、私も案1はとてもいい案だと思うのですが、団体運営力向上科目のところ、まだそういう段階ではないかもしれないですが、私は全然こういう分野ではない違う分野でNGOに属しているのですが、そのNGOを立ち上げた方はだんだん年をとってきて、そろそろ畳もうかなとおっしゃっていて、こういう運営力は団体をつくるのもそうですし、維持をさせたり、では最後やめるとなったらどうやってやめるのだろうと、そ

の一連があると安心して逆に始められると思うのです。ですから、ぜひ終わりまで。

ボランティアは、なくなればいいものではないですか。ボランティアをしないで済むならそれが最高ではないですか。緑地保全を勝手にみんなが日常のようにしたら、それが一番ワンダフルで、わざわざ団体に、NGOでしなければいけないということが本当は少し残念なことかもしれないので、終わるところまであるといいかなと思います。

○高川委員　すごく重要です。

○野村座長　今、皆さん委員の方のいろいろな意見を出していただいたところで、都としては、ある程度、こんな団体が育ってほしいとか、こういう団体に長く成長して欲しいとか、そういうような思惑みたいなものは見えてきた、わかったかなと思うのです。

けれども、どうもそういう団体ばかりではないというか、そうなるようとしている、していないも含めて、今、思い描いているようになってほしいところを目指していたり、目指していなかったりと、いろいろなパターンの団体があるということも確かなわけです。

そうすると、都が全部をフォローできるわけではないと思うので、いろいろな団体のニーズがあるでしょうし、だけれども、そのどこを担っていかうとするのか、目指すのかということだけは、はっきりしておいたほうがいいのかという感じがします。

僕も、この団体運営力は、自分自身もいろいろ足りないところがあるなと思っているところなので、団体をつくって終わらせていくところまでになると必要なことだとは思いますが、けれども、最初から余りそういうもので頭でっかちになってしまうと、今度は勢いでつくろうということも抑えてしまうことにならないかなというのはちょっと心配です。そのところを、うまくどういうさじかげんでやるのか、それは中身の問題ですけれども。

○小野委員　私は今言われている勢いでつくるわけではないですけれども、入り口的な部分は案1のどこかに少し入れてあげて、専門的に本当にやりたいのだと、要するに資金もしっかり獲得しながら運営したいのだという人が、このオプションになるのか必須になるのかわからないですけれども、その部分の講座でもいいのではないかなと思います。

○篠原委員　本当に、本格的にNPOの運営というところと、いろいろな中間支援の団体がやっている講座がたくさんあるので、里山に限らず、一般的な部分はそこまで頑張っここに入れ込まなくてもいいかなという気はします。

○野村座長　そうだと思います。

○篠原委員　ほかにもいろいろな講座があるよというのを紹介してあげれば。

○高川委員　さわりですね。

○篠原委員 そうです。さわりなのだなと思います。

本格的にやると全然終わらないと思うので。

○野村座長 いずれにしても、都が全部を担うことはできないと思います。

○篠原委員 今の里山の団体に足りていない部分、ピンポイントにこの部分というのが何かうまくできればいいですね。

○高川委員 自分の状況を振り返る自己診断のシートがあつたりすると、「こんなことしないといけないんだ」とか、「やっぱSNS使わざるを得ないのか、どうしよう」とか、「だったら解散しようか」、「担い手を変えてでもミッションを継続しようか」となると思うので、そのラインアップというか決断を促すための機会というところが結構大きいのではないかなと思います。

お金を払えばこんな講座が民間でありますよというのは、いっぱいチラシがあると思うのです。

○篠原委員 気づけるのが大事ですよ。

○松岡緑環境課長 そういった意味では、先ほどの御指摘もあったと思うのですが、この次の基礎講習にあるのですけれども、「ネットワークづくり」という項目がありまして、そこの中でほかの団体の方々と情報交換をできるようなものがあると、自分の団体以外のこういう取り組みを取り入れられるのかなと思うのです。

○高川委員 ちょっと1件なのですけれども、多分そこがすごく難しく、私も答えを持っていないところなのです。

資料1の3ページ目の一番下の【参考2】で「構成員」、「主として40代から60代」と書いてあると思うのですが、例えば仕事をしている方が、副業としても自分のやりがいとしても、こういうところに団体をつくって参入をしたい人が結構今ふえているのです。例えを言うと森の幼稚園を経営したいとか、そういう人がどう既存の場所とか、別の世代の方がいる団体があるところに入っていけるかが結構肝かなと思うのです。

私もそこは答えを持ち合わせていません。ですので、結構、現状分析がないと、なかなかこのネットワークというのが何なのかというのは出てこないのかなと。これまでネットワーク、ボランティアでやってきた時代が20年、30年と長く続いて、これが当たり前のようなのですけれども、もうこれが当たり前じゃなくなるかもしれないので、もっと自律分散型の個の時代みたいなことを今、言われていますよね。

ちょっとこの辺の参入の仕方は、来年だと思うのですけれども、考えた方がいいかなとい

う気がしています。

○野村座長 まず、2ページ目にある方針については、大方の意見としては案1の形でいいのではないのかなということですね。

これのもとには、団体運営のコースを別にやったらいいかなという案2からいったのですか。案2の内容を入れるに当たって、これだとちょっと難しいかなと。そういうわけではないのですか。

○松岡緑環境課長 案1から案3までは、全て理論的にこういうパターンがあるという考え方でございます。

我々としても、一番おさまりがよくて、これまでの形も継続しつつやっていくとなると、案1が一番いいのかなというところでお示ししています。

○野村座長 そのこのところは、こういう方向性でいいかなというところですね。

ありがとうございます。

それでは、続いて来年度の基礎講習の内容について、お願いいたします。

○事務局 資料2をごらんください。

前回の委員会では、「自然公園管理の基礎」をやめて、講習時間を縮小し、実践活動の導入を検討すると説明させていただきました。これは、講習時間の長さが受講を決める障壁になっているとの推測から提案させていただいた案だったのですが、講習時間の圧縮は見送って、講座内容の魅力向上と広報の工夫で受講生確保に努めていく方針に変えたいと思います。

そこで、平成29年度の基礎講習科目の内容を一つずつ見直し、その課題と改善案を表にまとめさせていただきました。

令和2年度の講習は、平成29年度の講習をベースにして、個々の科目に改善を加えて編成していきたいと考えております。

基礎講習には、現場指導力の向上のための科目と、団体運営力の向上のための科目の両方が含まれています。表の赤字が現場指導力の科目、青字が団体運営力のための科目です。先ほどもお話しましたとおり、基礎講習の時点では両者を切り離すことはせずに、バランスよく組み合わせていきたいと考えております。

また、科目のうち一部、補足説明させていただきます。

まず、「ボランティア活動の理念」について。

こちらの科目は、2時間の講義と2時間のワークで構成されておまして、仲間づくりや資金確保の方法などの基礎を学ぶことができる講義となっております。また、講義の中で、

指導者1人で全ての事務を行おうとせず、団体構成員で役割分担をして団体運営をしていくことの重要性が説明されておりまして、団体運営の基礎を学ぶには非常に有意義な科目であったと考えています。

しかし、先ほども説明をさせていただきましたとおり、当科目で学ぶことができるのは、本当に団体運営の導入部分のため、具体的な手法を学ぶには別科目が必要になると考えています。より詳細な科目を導入するのであれば、専門講習に盛り込むことを考えていきたいと思えます。

続いて、「指導法の基本」になります。

こちらの科目はインタープリテーションという概念になじみがない受講生が多く、講座の内容について初めて知ったという人が多くいました。新しい知見を与えることができたという意味でよい講座だったと思いますが、インタープリテーションという用語の意味を十分に解説して、科目タイトルを変更することを検討していきたいと考えております。

そして、内容を一番大きく見直したいと考えているのが「ネットワークづくり」です。

科目の構成は45分間の講義と、2時間15分のワークになっております。ワークについてはグループに分かれてチラシづくりをするのが主な内容となっております、内容とタイトルのずれが多く多くの受講生から指摘される結果となりました。

当講座には、普段は異なる場所で活動を行っているボランティアの方々が集まってくるので、まずは講師の方からネットワークづくりの手法と事例の紹介をいただいた後に、受講生同士のネットワーク形成の場にできないかということを検討していきたいと考えております。

続きまして、資料3をごらんください。

先ほどの改善点を踏まえまして、令和2年度の講習スケジュール案を作成いたしました。来年度はオリンピック・パラリンピックの開催年度になりますので、大会開催期間を避けての構成になっております。

また、野外実習を含む科目は秋に実施するようにスケジュールを組みました。受講生同士のネットワーク形成を目的とした科目は初回に実施し、同日に東京都職員を講師とした「自然環境行政」を実施する予定ですが、ここの時間配分を平成29年度から変更しております。

「自然環境行政」を2時間から1時間と、1時間削っておりまして、その1時間を「ネットワークづくり」に充てる予定です。

講座のスケジュールや内容に関しまして、御意見をいただければと思います。

以上が、令和2年度の基礎講習に関する説明となります。

○野村座長 ありがとうございます。

これは、前回は平成29年度の基礎講習の内容については、アンケート的なものも含めて資料をいただいたものですね。

主にその意見を反映して、変えてみたいというところですけども、どうでしょうか。

○高川委員 すごく難しいですね。

○野村委員 まず、基礎講習の大まかな内容として、どの程度といいますか、これはいろいろ全体的にちりばめてあると思うのですけれども、基礎講習としてはこのぐらいの内容が欲しいというところですね。

例えば、こういう視点もあったほうがいいのではないかと、基礎講習でここまでやる必要があるのかという意見でもいいかと思うのですけれども、どうでしょう。

○小野委員 「ネットワークづくり」でチラシづくりをやるのですか。

○事務局 平成29年度の講座ではチラシづくりです。グループに分かれて、レイアウトをどうするということをやっていたのです。

○小野委員 来年度は。

○事務局 来年度の講座に関しては、チラシをレイアウトすることではなくて、いろいろなところに触れていきたいとか、グループワークでチラシづくりしかやらなかったのも、それ以外のネットワーク形成の手法とか、そういったところの紹介を講師の方にしていたりできないかというところがまず1点。

あとは、いろいろなところから受講生が集まってくるので、それぞれの活動の紹介などをさせていただいて、受講生同士のネットワーク形成ができないかを考えておりました。

○高川委員 一番初めの「ボランティア活動の理念」というのは、全部を包含するような内容なのですか。それとも、理念的なところだけですか。

○事務局 これについては、全部といいますのが、ボランティア団体の運営面です。

○高川委員 今からこんなことを学びますよという圧縮ではない。

○事務局 そういう講座ではないのです。

団体運営に関するところを広く伝えていただくような講義になっています。

○高川委員 これから設ける団体運営に関する専門講座の概要が、この「ボランティア活動の理念」ということと、「ネットワークづくり」に当たる2つということでもいいですか。

○小野委員 そうですね。入り口的なあれですね。

これに何時間なのですか。

○篠原委員 前回の講義の、平成29年度の資料を見ると、小出さんがボランティア活動の理念を話しています。

○事務局 講座としては4時間です。

○篠原委員 ボランティアとは何かから始まっていて、ボランティアのギリシア語の語源から始まって、ボランティアってこういうものですよという説明があつて。ボランティアの理念とかリーダーとは、ボランティアの傾向みたいな。

○小野委員 概論ですね。

○篠原委員 ボランティア概論みたいな感じでした。

それが、一番最初にあつてもいいのかなと私は思ったりもしました。

○高川委員 それはそれで悩まないといけないのでは。

○篠原委員 あとは、「ネットワークづくり」というのが、このタイトルの並びの中でどういう、ネットワークって団体のネットワークというか人のネットワーク。

○松岡緑環境課長 団体同士です。

○篠原委員 どういう位置づけなのかなというのが。

○小野委員 団体同士で仲良くできるところもあるのですけれども、お互い競合のときもありますから。

○高川委員 専門のほうで、オプションで組織づくりのことを新しく入れるではないですか。だから、そのエッセンスを伝える基礎講座というのは1こまあつたほうがいいと思うのです。

私の質問は、それを一番初めのものと2こま使えるのかということ、この「ネットワークづくり」だけでやるのかという質問だったのです。1個目は理念を伝えるので、この「ネットワークづくり」というところを名前を変えて、その専門の圧縮の3時間にしたらいいのではないですか。

例えば、「社会的インパクトを与える持続的な組織づくりとは」とか。

○小野委員 私は大好きですよ。

○高川委員 結局、その専門のラインアップがある程度見えてこないと、この「ネットワークづくり」という枠を多分変えないといけないと思うのですけれども、やるところが思い浮かばないのかなと思います。

○野村座長 そもそも基礎講習のところで、「ネットワークづくり」が入っている狙いというのはどこにあるのですか。

○事務局 「ネットワークづくり」の狙いとしては3点挙げられていまして、「多様な主体とのネットワークのつくり方を学ぶ」、「他主体との交流、連携に必要なポイントを理解する」、「ボランティアとしての実践的な情報収集、交換、連絡の方法を学ぶ」というところを、前回の講習では狙いとして挙げさせていただいていました。

○野村座長 これはどうなのでしょうね。

基礎講習に必須なのかというところも。

○事務局 内容としては、先ほどお伝えしたとおりワークとしては2時間15分チラシづくりだったのですが、講義の中ではホームページのつくり方ですとか、電子媒体、ホームページ以外にどういったPR活動ができるのかとか、広報活動がメインで紹介されているような講習になっています。

○小野委員 ネットワークではないような感じもするのですが。

○篠原委員 広報ですね。

○事務局 そうですね。ですので、受講生からのアンケートでも、ちょっとタイトルと内容というところにずれが生じているんじゃないのかというところが、多く指摘として挙げられている結果になっています。

○柳川委員 団体にいたりして人を集めたいと思ったときは、意外と広報するというよりも、興味を持ってきてくれた人にどうやってその後また来てもらえるようにするかみたいなところが知りたいのではないのですか。

興味ある人は1回は来てくれるのだけれども、その後どうやってその人をまたずっと取り込んでいくか。でも、勝手にメーリスに入れたら悪いしなみたいな。

○小野委員 逆に、私は運営のほうが大好きな専門のところなのです。

そこでなかなか難しいのは、例えば、リピーターをふやしたいわけで、そうすると顧客満足度を高めないといけないわけです。顧客満足度を高めるためには顧客がどういう構成になっているかをしっかりちゃんとやらなければいけないし、多分御存じだと思いますが、データベースファンドレイジングというのですけれども、データベースをちゃんと使ってやるというのと、例えばテクニック論的に偏ってしまうと、サプライズをどうしようにつくれるかは、多分ネットワークの何かしらかワークショップでいろいろなアイデアを出しあつてできると思うのですね。

高尾の森自然学校でやっているのは何かというと、その日に参加した参加者が途中で撮っている写真を、最後に皆さんにプレゼントですということで、3分ぐらいスライドショーを

ずっと流すのです。「え、さっきの写真が」。最後に団体の合流の写真をみんなで一堂に撮りますよね、それをSDカードですぐに入れて1分後に流すのです。そういうサプライズがあると、そういうところで感動を生んだり、ここの感動の部分は結構奥が深いのです。顧客満足。これは専門の内容だと思うのです。

○篠原委員 いきなりこういうツールを使いましょうという広報の科目が基礎に入っている、何で必要なかがまだわかっていない段階の1日目だと思うので、多分まだそこではなくて、何が必要かを知るところからなのかなと思うので、こういう内容でワークをやるのであれば、最初に自分たちに必要なものが何かという分析からなのかなと思います。

○高川委員 具体的な提案なのですからけれども、自分がやりたいことあるいは団体がやりたいことのコンセプトシートづくりみたいなワークだといいと思います。

○小野委員 すごくいいと思います。

○高川委員 今、生態学会の演習で実は3年ぐらいやっていて、共感を呼べるアクションプランづくりみたいな。自分とか団体が何をやりたいかを1枚の絵にして、できれば行動計画のワークシートにして、顧客は誰なのか、何を变えたいのか、自分のミッションは何なのか、アクションはどこなのか、誰から知り合えるのかみたいなものも簡単なA3で1枚ぐらいのワークシートに落とすか、絵で描くみたいな。

結局それが、共感を呼ぶためのチームビルドとか、ファンレイズとか、公共的な役割の説明とか、全てにおいて必須になってしまうので、もやもやしているものをとりあえず絵にしてみるワークと、「本当はこれだけのラインアップを学ばないといけないのですよ」「ああ、そうなのか」と言ってもらえるので、3時間ではちょっとおさまらないと思いますけれども。4時間ぐらいのコースです。

○小野委員 私も、それは入り口でやるべきではないのかなと思います。

私もワークショップでやっているのが、そこをつくった後の次にあるのが団体のレーダー分析なのです。レーダー分析でどれぐらい偏りがあるのかというのもやるのですけれども、それは多分、専門に入ると思うのです。その切り分けのラインだけしっかり整理できていれば、すごくいいのではないのかなと思います。

○高川委員 割とNPOのソシオ・マネジメントの本は幾つかあるので、とりあえずそれをまるまるコピーして専門をつくるというイメージをしておく、この基礎に何を入れない、どんなラインアップを説明しないといけないのかというのは、ちょっとイメージがつくかなと思います。

それを3時間ですか。頭の体操ぐらいにしかならないのかな。

○小野委員 4時間ぐらいはほしいですね。

○松岡緑環境課長 時間はありますよね。

○事務局 はい。

「ネットワークづくり」は来年度、1時間ふやす予定で、時間としては4時間の枠は確保できるかと思います。

○小野委員 「ネットワークづくり」という名称なのか、それか今、言われているような組織という表現なのか。活動の入り口の名称があるといいのかもしれないです。

○高川委員 「活動のコンセプトづくり」とか。

○小野委員 私もネットワークづくりは大切だと思うので、例えばネットワークづくりでいい例が、実はここにいる篠原さんなのですよ。

高尾の森自然学校という自然学校でやっているのですけれども、年に1回、ネットワークづくりのイベントがあるのです。もう6回ぐらいやっているのですけれども、6回毎回出てきているのですよ。

それが何かというと、やはりネットワークを自分で持ちたいと思っている人は積極的に出てくるのですね。だから、どれだけ名刺交換とか、ああいうようにつながりたいかという、その必要性をしっかりと知ってもらうのがあれだし、ネットワークでつながることによってレベルアップを図りたいのであれば、テーマを区切ってワークショップか何かで、それこそワールドカフェか何かみたいな形で、全体と全部がつながるような形のワークショップの手法で、広くいろいろなところとつながってもらって情報交換をしてもらうほうがいいのではないのかなと思います。

○高川委員 そういうのは1回目でもいい気がします。

○野村座長 そういう意味では、名前、題名は何とするかは別として、そういうオリエンテーション的なことで、その後の講座を受けるモチベーションが上がるような、「これだからやっぱりこれは知っておかないとまずいよね」と。興味がないなと思うこともあると思うのですね。

これは出席率はどうなのか。割とみんな真面目に出るのですでしたか。

○事務局 そうです。

○野村座長 真面目に出るのですね、皆さん。

○小野委員 1回の講座って定員数は何人ですか。

○事務局 50名です。

○篠原委員 ネットワークづくりをワークに、高川さんの提案しているものに変えるというのでもいいのですけれども、まずは1日目をそういうモチベーションの上がるワークにしたい、自分が何をやりたいのかっていうのが整理できるワークにしたいというのはあるなと思います。

もちろん、ネットワークづくりというのか、広報というのか、そういうこともどこかにはあってほしいのですけれども、何か入れかえてうまくできないかなと。

○高川委員 知らない世界にばんと入って人とつながるといのがどれだけ楽しくて有用なことかというのが実感で伝わればいいと思うので、それはむしろ理屈ではなくて1回目にワールドカフェみたいなものを入れて、理念も大事なのですけれども、自分はこれを通じて地域とか自分自身の人生をどう変えられるかという希望、具体的なイメージを持ってもらうというのが1個目なのかなという気がします。

逆に、ボランティア活動の理念だけだと結構厳しいかなという気もしていて、自発的な活動という意味ではなくて、無償活動として里山保全にかかわる人もどんどん減ってくると思うので、さっき言った少額を稼ぎながら、森の幼稚園をやりながら場を守るみたいな人もふえてくるので、余りこれまでの奉仕の精神を教えるというのは、これからの時代変えたほうがいいかとは思いますがね。

むしろ副業で入ってくる人も歓迎ですし、里山を使って守るといふ参画の仕方がたくさんあるというのと、多様なネットワークとか自分の成長が大事だよということを伝えられる、そういう活動の理念というか、メリットとミッション、公的にやることの意義を伝えられる場になるといいかなという気がします。

○柳川委員 指導者育成なのですよ。

○松岡緑環境課長 そうです。

○柳川委員 そうだとしたら、自分の団体の問題を洗い出したり、どうやって自分がやりたいことを実現していくかということももちろん大事だと思います。それにプラス、そういった自分の考えをどうやって周りに伝えて賛同者をふやしていくか、ファシリテートしていくかという手法を伝えないと、実際に問題がわかってこうしなければいけないとわかっても、自分一人ではできない、誰かの協力が必要だし、団体に参加してくれる人はいろいろな立場の人がいるので、そういう人が一人一人、自分が指導者になったとして、どういうふうに立場が違う人たちの意見を聞くかみたいなことなどをお伝えするところが、ちょっと必要なの

ではないかなと。

○篠原委員 ボランティアの理念のところは、前回はその話が入っていたと思います。

ちょっとチームビルディング的な話が、たしかあった気がします。

○柳川委員 では、大丈夫です。

○篠原委員 それも必要だと思います。

○野村座長 座長ではなく、一委員としての意見になってしまうのですけれども、「自然環境行政」という時間は、聞いていておもしろい話なのですか。

ちょっと心配になって、2時間を1時間にするのがいいかなと思うのですけれども、2時間の内容があるのであれば、いろいろなところにコラム的にちょっとずつ割り振ったらいいのではないのですか。

割り振れるところと割り振れないところがあるでしょうけれども、完全に現場に出てしまってというようなところもあるのかなと思うのですけれども。全部まとめて話されても、さらっと「ああ、そうですか」と終わってしまうような感じもあるので、何か絡めて関係ありそうところで、東京都としてはこういうことをやっているのですよとか、そういう仕組みの話の話をちょっとずつ、どこかに入れ込んでいくような形でお伝えできないかなと思いました。

多分、まとまってしまうと非常に堅苦しくて、入っていかないのではないのかなと。

○事務局 前回2時間話していたときは、東京都の自然環境部がやっている事業を網羅的に話すみたいな内容だったのですけれども、1時間に減らして、特にボランティアとのかかわりが出てくるような事業に絞って御説明しようかなと思っていたのですけれども、それも保全地域だったり、自然公園だったり、場所でパーツごとに分けて説明するみたいなことは可能かなと。全くそういう話がないのも。

○野村座長 もちろんそうですね。

○高川委員 私はまとめたほうが良いと。どうしても必要な知識パッケージはあると思うので、苦しいのは一個にまとめてやったほうが良いと思います。

ただ、目的ですね。ここで知識を習得するとなると、結構大変だと思うので、こんな体系があるのだという概略とか枠組みを理解して、あとは手元の資料を見てもらうというところが大事だと思うのです。

考えると、例えばボランティアやりたいと思っている方は、おそらく市役所にほとんど行ったこともないし、それぞれの部署が分かれているとか、計画があるとか、根拠法があるとか、議会と市役所の関係とか、その辺もわからないので、要は行政の生態学を学ぶみたいな

感じはどうかと。実は縦割りってこういう意味があつて、それぞれが計画を持っていて、法律があつたりしますと。すごく似ているけれども、これとこれは本来の意味は違うのですとか、それを理解した上で働きかけをするととてもよくなりますよとか、あなたの今いる場所は実はこういう位置づけの場所です、東京都民全体から見て、目的はこっちではなくてこっちなのですよというのは学んだほうがいいので、各論はともかく、そういう縦割りがあつて計画と法律があるんだなという本当の基礎を理解してもらうくらいだったら、おもしろく話せるのではないのですか。各論は、もうかいつまんで、その枠組みが理解できていれば、「後で読んでください」でいいのではないのですか。

ただ、僕は絶対に必要だと思います。自然公園と都市公園は違うのだという理解がないと、わけがわからなくなるので、ここはもう仕方がないし、まとめてしまったほうが体系的な理解はしやすいかなという気がします。

○柳川委員 ばらばらだと、紙をなくしてしまったりしませんか。

野外で配られたものがちょっとどろどろになっちゃって、畳んで一緒に洗っちゃったのよねみたいなことがありますので、書類は一緒にもらいたいです。

○野村座長 ありがとうございます。

そうすると、今、話に及んでいなかった実習部分の内容的なことは、これはほぼ前回は踏襲するような形で、これ自体の御意見はどうですか。

○高川委員 私は、赤はとてもいいと思うのです。

むしろ、このインタープリテーション、指導法のところと自然観察のところは、私なら一緒にやれますけれどもね。

2こま目はもうちょっとリスクマネジメントが入っているということなのですか。連続したもので捉えてもいいのでしょうか。違いがちょっとよくわからない。

○野村座長 そう言われるとそうですね。

○高川委員 自然観察のほうは、もうちょっと生態系の知識のこととかリスクマネジメントのことを教える感じですか。

○篠原委員 安全な活動はまた別にあります。

○事務局 安全な活動は最後のところになるので、リスクマネジメントということに関しては別の講義で受けていただくこととなります。

○高川委員 ちゃんとすみ分けができれば、2こまでもいいのですけれども、どうしても削らないといけないとなると、私だったらこれを1個にするかなと思います。

あとは、自然の仕組みに関する座学とかですか。それが自然観察のほうなのですか。ちょっとその辺がわからないので。

○松岡緑環境課長 一応、講義が1時間入っていますので、座学的な要素もあるのですが、指導法の基本はどちらかというともう少し実際に教える側といいますか、インタープリテーションのほうに主眼があって、自然の理解はそもそも水辺と草地はこういうものなのだよということをまず理解してもらうという。

○高川委員 実習は野外でということですね。

○松岡緑環境課長 そうです。

○高川委員 実践的な形ということですね。

わかりました。

○柳川委員 一つ思ったのですが、基礎講座スケジュールは「インタープリテーションの展開方法」という仮称なのですが、先ほどの課題のところでインタープリテーションという言葉の意味もまだ理解が十分でない受講者も多いということだったので、それだったら、その言葉は特にタイトルに入れなくて、授業の中でちゃんと説明していけばいいのではないですか。

何かを学ぼうと思ったときに、例えば算数を学ぶと言って、算数の言葉の意味がわからないと何を学ぶかわからないですよ。そういう感じで、理解できないタイトルがついているとどうなのかなと、ちょっと思いました。

○松岡緑環境課長 そうですね。ちょっとここは変えて。

○高川委員 今の趣旨とは違うかもしれないのですが、このタイトルは公表するのですよね。

恐らくここがブランディングにすごくかかわるので、タイトルは本当に魅力的なものをつけたほうが良いと思います。

○小野委員 それは、賛成です。

タイトルは物すごく重要だと思います。

○高川委員 それはここでは議論しきれないので、事務局にお預けするしかないかなと思うのですが、

○小野委員 チラシではないのですが、タイトルだけで「参加したいかな」「え、これ何」みたいな、それで参加者の応募状況は全部変わりますから。

○高川委員 同じ内容だとしてもですね。

これだちょっととがってない。もうちょっと、とがったほうがいいです。

○松岡緑環境課長 それは、もうちょっと魅力を伝える表現にしたほうがいいですか。

○高川委員 そうです。

○松岡緑環境課長 かつ、内容がわかるような。

○高川委員 少し目を引くという意味ですね。

○小野委員 それこそ、広報の講座のあれではないですけども、チラシがもし出たとして、一番最初の指導者養成の部分から目が入るではないではないですか。そこで興味がなかったら、もうそれでアウトなのですね。次に入ってくるのが、中身の今言ったテーマか、あとは日程が合うかなのです。そのテーマで、びびっと自分の中で共感が持てるようなキーワードが入っているかというのは物すごく重要なのです。

内容は内容で、内部資料はこれでもいいかもしれないですけども、表現方法はもう少し検討したほうがいいかもしれないです。

○松岡緑環境課長 わかりました。

次の話題の広報とも関係するのですけれども、デザインはこの次の説明の中でありますが、確かに表現のところは、前回も御意見いただいていたかと思うので、そこは工夫していきたいと思っています。

○柳川委員 専門的レベルで、どの人たちに焦点を当ててやるかで、指導者育成だけけれども、指導者の人が知っているフレーズと、指導者になろうとしている人が知っているとか響くフレーズは多分違うのですね。

○松岡緑環境課長 それは、副題みたいなものでつける形ですか。

○小野委員 副題もいいですけども、キーワードですね。

○高川委員 難しいですけどもね。

あとは、どのペルソナを中心に据えるかというのは、対象を絞るしかないと思うのです。

○松岡緑環境課長 わかりました。

○野村座長 そうしたら、主に座学のところでいろいろと意見が出ましたけれども、全体としては1日削って7日ですか。

○事務局 今のところ7日なのですけれども、講師の方の都合もあります。今、「ボランティアの理念」と「応急手当・救命方法」の講座を同日と記載させていただいていますけれども、もしかしたらここが分かれてしまう可能性もあります。

○高川委員 1つ目の「ボランティア活動の理念」のところは、今、出た意見で見直せそう

ですか。割と、議論がぱっと拡散して終わったと思うのですけれども。

○松岡緑環境課長 それは「ネットワークづくり」と「ボランティア活動の理念」を一体でやる形になりますか。

○小野委員 ワークショップの中に理念のあれも入れてしまえば、できないことはないのですけれども、今ここにある「ボランティア活動の理念」は前のほうに持ってきたいですけれどもね。

○篠原委員 そうですね。

○高川委員 整理しますか。

○篠原委員 できれば、内容を変えた「ネットワークづくり」のこまと、「ボランティア活動の理念」のところを1日目にあって、環境行政が前半がいいような気もしますけれども、どこかにあってというスケジュールがいいような感じがします。

○小野委員 そうですね。

私だったら、「ネットワークづくり」と「ボランティア活動の理念」を入れかえてしまうと思います。

○篠原委員 「ネットワークづくり」を、ここに書いてある本来の内容でやるのか、高川さんが言っていたコンセプトとテーマを。

○小野委員 イメージは、私はもう自分だったらこうやるなというのが、「ボランティア活動の理念」をさっき高川さんが言われているように整理をして、その中でワークショップで、それこそみんなでグループごとに「私たちってこういうのでやってます」みたいなつながりを含めながら、1日目はわくわくしながらでいいのではないかなと思います。

○高川委員 そう思います。

○小野委員 「自然環境行政」は、私は逆にあってもいいと思うのです。環境局が主体でやっていることですから、そのところで話をするのは全然構わないと思うのです。

だけれども、「ネットワークづくり」とここのタイトルの上から2番目に書いてあるのですけれども、どちらかという「ボランティア活動の理念」のそれを活用しながら、ワークショップでやるのが一番効果が高いのではないかなと思うのです。

そうすると、ここにある「ネットワークづくり」というのは、また別のテーマで別の日でやるのもありかもしれないです。

○松岡緑環境課長 「ネットワークづくり」は、そうされたい団体の方々が多分そういう機会を生かしてお互いに名刺交換でもされてつなげていらっしゃるかなと思うので、今、先生

がおっしゃったように、こういう「ボランティア活動の理念」というか、まず自分たちの問題点をそれぞれの団体に発表していただいて、その中で意見を交換しながらお互いにネットワークについても深めていっていただくような形でもいいかなと思います。

○小野委員 そうですね。

○高川委員 初回にやるのだと、余り課題出しから、ネガティブから入らないほうがいいと思います。

例えば「里山へGO!」を見て新規参入してきて何かやりたいと思っているペルソナがいたとして、まだ課題も何もないと思いますし、それよりはこの連続講座を相当苦勞して受けた後には自分の人生が変わるかもしれないみたいな期待感で来られていると思うので、これを通じてどれだけ公的な役割が担えるとか、知らなかった社会が開けるとか、新しい人脈がつけられるとかという期待感が持たせられるものはやはり1回目がいいかなと思います。

課題分析のところは逆に、専門のほうで組織運営のところのエッセンスをやったほうがいいと言ったではないですか。その一番初めのところで、例えばちょっと宿題として持ってきてもらうくらいでいいかなという気がします。

○松岡緑環境課長 基礎講座ではなくて、専門のほうにですか。

○高川委員 ではなくて、基礎講座に専門講座の圧縮版を入れないといけないと思うのですが、その一番初めのところでまずは自分の振り返りをやってから入る。

やはり、初回に何を持ってくるかのところが。

○柳川委員 今のお話だと、やはり「ボランティア活動の理念」が最初にあって、わくわくづくりをして。

○高川委員 ちょっと名前は変えたほうがいいかなという気はします。

○野村座長 そうですね。

○柳川委員 今、この12月の4時間に入っているボランティア活動のところに、「ネットワークづくり」という名ではなく違う、自分の団体を振り返るみたいな。

○高川委員 「持続的な活動づくり」みたいな。

○柳川委員 あと「自然環境行政」とかも、活動すると、東京都がこうやって緑地保全をしていることでこういう場があるというのがわかると思うので、活動の後にあってもいいかもしれないですね。

○野村座長 どうですか、まとめられそうですか。

○松岡緑環境課長 順番は考えなければならないと思います。

まず最初に、ボランティアの理念的な、ちょっと名前を変えたものから入るということで進めさせていただきます。

○高川委員 市民として責任を持って、地域の環境自治にコミットする意義とか、そういう必要性が時代としてとてもあるとか、場合によってはSDGsの話とか。

あと話せるのは何でしたか。東京都のパークマネジメントプランは、これとは別なものでしたか。

○事務局 それはまた別の局です。

○高川委員 そうですか。

東京都の里山を市民が主体になってつくっていく意義みたいなものを伝えるというものですよね。

○小野委員 私もそう思います。スタンスはちゃんと見せてくれたほうがいいと思います。

○高川委員 多分、従来のシニアのボランティアだけではなくて、いろいろなかかわり方が求められていますというので、ネットワークのワークショップがあったり。

○小野委員 ただサービスでやるということではなく、なぜ環境局がここでこういうことをやるのか、それも含めてちゃんと説明していただいたほうが、僕はすごくいいと思います。

○高川委員 自走できる活動をつくれる、責任を持った市民をつくりたいということですね。それは結構すごい位置づけだと思います。

○柳川委員 今、やっている人たちをこういうふうによくするというよりも、東京都が先導して、今、求められているボランティア像ではないですけども、何かそういうものを最初に提供する。

○松岡緑環境課長 それを目指してもらえるかなという感じですか。

○小野委員 頑張りましょうみたいなこと。

○松岡緑環境課長 なるほど。

○小野委員 批判も来ますけれどもね。そう簡単じゃないよと。

結構批判もあるのですけれども、それはそれでちゃんとスタンスは見せていただいたほうがいいと思うのです、

○松岡緑環境課長 最初に目標を示すということ。

○小野委員 そうです。

○松岡緑環境課長 わかりました。そういう方向で進めさせていただきます。

○野村座長 では、内容的なことはこのぐらいにしてよろしいでしょうか。

次に、行きます。広報活動についてです。

資料4「基礎講習の広報活動について」、事務局からお願いします。

○事務局 資料4の「令和2年度 基礎講習の広報活動について」をごらんください。

前回の委員会で、パンフレットデザインの魅力向上が必要との御意見をいただきました。委員会後の調整にてデザインを外注することに決まりましたので、多くの方に手にとってももらえるような魅力あるデザインに改良していく予定です。

また、パンフレットには過去の受講者の声を載せる予定です。現在12名の方から声の掲載許可を得ておまして、そのうち2、3名の声を抜粋してパンフレットに掲載させていただく予定です。環境局のホームページには受講生の声を全文記載して、広報活動に努めてまいります。

次のページをごらんください。受講生の募集期間についてです。

専門講習の実施年度を令和3年度にしたことにより、スケジュールに余裕ができましたので、基礎講習の募集の締め切りをおくらせて募集期間を延ばすことが可能になりました。平成29年度の講習では募集期間が1カ月程度でしたが、令和2年度では2カ月間の募集期間を設けたいと考えております。

続いて、「広報手段」と「チラシ配布先」の案になります。

ここに記載しているのは一例ですので、そのほかに広報先として適した場所や手段等がございましたら、御意見いただければと思っております。

以上が、次年度の広報活動についての説明となります。

○野村座長 それでは、デザイン性は向上させるということで、内容的なことの中にも載せるようなことはこんな案が出ていますけれども、いかがでしょうか。

○高川委員 これすごくいいなと思うのですけれども、もう一個載せたほうがいいなと思うのが、ちょっと難しいかもしれないのですけれども、受講し終わったらどんなふうになれるかとか、受講した方が実際にどういうふうになったかというような、受講の後のイメージがつくようなものを載せられるといいなと思います。

○松岡緑環境課長 そういった意味では、受講者の声というところで、講座を受講したことによる効果のようなものを今回もう掲載の許可をいただいておりますので、実際に我々のほうでインタビューのような形で情報を収集して、ここの中に入れられたらなと思っております。

○高川委員 よさそうなのはありますか。

○松岡緑環境課長 はい。

実際に団体を立ち上げていらっしゃるような方もいらっしゃるって、そういう方の御意見などをいただくと、ほかの方も参考になるのかなと思っているところでございます。

○柳川委員 プラスに働くかマイナスに働くかわからないのですけれども、自分が参加しようかなと迷ったときに、「どんな人が参加するんだろう」「今までどれぐらいの人がこれを受けてきたんだろう」とか、そういうのって若干気になると思うのです。ですので、今までの実績とか。実績でプラスになりそうなことを入れると、行ってみようかなと思うと思ったのですが、どうですか。

○篠原委員 ターゲットは、明確にどこかに書いてありますか。

○事務局 資料1の3ページ目になります。

○篠原委員 講座のターゲットは40代から60代、既にどこかの団体に所属している人ですか。

○事務局 そこがメインになってくるのかなとは思っているのですけれども、ただ保全地域の「里山へGO!」のリピーターの中でも、指導者として今後活動していきたい意思がある方がいらっしゃる可能性ももちろんあるので、メインで40代から60代の団体に所属している方々にお声がけさせていただくところを続けつつ、「里山へGO!」のホームページですとか、SNSとか、そういったところの広報もあわせて行いたいと思っています。

○篠原委員 40代がターゲットですか。

チラシをつくるにも、ターゲットがどの辺なのかがあるといいだろうし、言葉遣いなども。

○小野委員 そうなのです。

前に内閣府がボランティアのアンケートをとったときに、女性が7割、男性が3割なのですね。男性の3割はほとんどがリタイアした50代後半から60代。女性が7割で多いのは主婦とかそういうところで、収入に関係なく活動ができるというのが多かったのです。

このアンケートを書いてもらっているのを見ても、そうなのです。男性はほとんど60代、70代なのです。

だからといって、男性の年齢の高いところをターゲットに見ていても、悪いことではないのだけれども、それよりは若年層の掘り起こしをしたいのであれば、そういう内容とか言葉の表現にしなければいけないし。

○篠原委員 どの辺をふやしたいのですか。

今、野村さんは団体でふやしたいあたりってどの辺ですか。

○野村座長 うちの団体として欲しいのは、20代とか30代です。

実際、そういう人もちょっとは来ていますけれどもね。

○高川委員 20代というのは、社会人ですか。

○野村座長 社会人です。

○高川委員 独身はターゲットにし得ると思うのです。ボランティアに使える持ち時間が全然違うので。あとは年齢ですかね。

○篠原委員 私の中では、独身の生活が変わった瞬間に離れてしまう、結婚した途端に離れ離れてしまうという危険もあります。

○小野委員 結構多いです。

○高川委員 長い人生の入り口にはどこかにしておかないといけないので。割と女性は子育てが終わったら戻ってくるというパターンは結構多いですけども、逆に学生はなかなか戻らないです。卒業したらおしまい。

○篠原委員 根づかない。

30代、40代の働いて、一応結婚していて、子供がちょっと手が離れてきたかなぐらいの方が、私の感覚では何かを求めているというか。

特に40代、働き盛りで休日の過ごし方を持て余している人が結構入ってくるような感覚があります。

○高川委員 参加はできますけれども、リーダーはなかなか難しいです。

○小野委員 そうなのです。

○篠原委員 そういう人が結構リピーターというか、常連で来てくれる可能性もあるなと思ったりします。

○野村座長 いずれにしても、どちらかという、今まで参加していた方はかなり高齢ですね。平均70代というときもありましたから。

○柳川委員 多様性を上げるという意味では、何もしなくても比較的、高齢の方は集まりそうではないですか。

それならば、例えば今欲しい、若くて、30代とか40代の方とか子連れの人とか、わからないけれども、いろんな人といっても今足りていないほうの人がチラシに載るといいですね。

○野村座長 そっちに振ったほうがいいのではないかということ。

○高川委員 むしろ、そうすべきです。

○野村座長 それはそうだと思います。

○高川委員 既存の人を都の広報誌に載せれば、クリアできている話だと思うのです。

広報紙をつくるときに、一番効果的なのは本当にただ一人に絞る。ペルソナマーケティングというのですけれども、その絞り込みを結局。

○小野委員 結構データがないと、できないのです。

でも、いいのではないのですか。若者というわけではないのですけれども、30代、40代向けでも。

私が思うのは、東京都だからチャレンジできることだと思います。地方に行ったら、そんな30代、40代はいないですから。ましてや、里山なんてそこら中にあるからと言われてしまいますから。

それを考えると、逆に東京都だから若者がまだいるところで、チャレンジできるモデルをつくれるのではないのかなと思います。

○高川委員 例えば、環境意識がものすごく高くて、環境コンサルに勤めている方の場合、本当に働き詰めの状況でも、月に何日か自己実現、人生のためにこういう活動に参加してくれる人はいるのですけれども、本当にそれは超ハイレベルで少ないです。でも東京だったら、20人くらいいるかもしれない。ほぼ全員、私の知り合いだと思います。

その20人に絞って届けたいというのもありですし、逆に専業主夫や専業主婦で働いているけれども、マスターまでは生態学を学んで、ただ子育てでぶちっと切れて、ちょっと将来のことが見え始めて、何かチャレンジしたいとくすぶっている人だったら数桁ふえます。

○柳川委員 そういうターゲットにしたい人のストーリーがチラシにあったら、すてきかもしれないです。

○小野委員 いいかもしれないですね。

○篠原委員 立ち上げた人は、何歳ぐらいの人なのですか。

○事務局 受けた当時は、30代の方でした。現時点では、40代です。

○篠原委員 そうというのがうまくストーリーが出せると、実際に立ち上げてというところが。

○高川委員 同じチラシに2属性か3属性ぐらいまでは無理をすれば入れられますけれども、幅広くは狙わないほうがいいです。それだと、つくる意味がほとんどなくなってしまうので。

それは、チラシをつくってくださるデザイナーさんにも必ず聞かれます。動かしたい一人はだれですかと。ちょっとそこで絞り込みをしておいたほうが、男性か女性かで、どんな未来が開けますとか、響く言葉とか全部変わるので。

○小野委員 受講者の声というのは1人だけではなく、複数人ですよ。

○事務局 今のところ載せていいと言ってくさっているのが、12名から声が上がっています。

す。

○小野委員 12名分、載せるわけではないですよ。

○事務局 チラシにはその中から抜粋して、2名、3名。

○高川委員 バランスよく。

○小野委員 そうですよ。

バランスよくですね。

○事務局 ホームページ上には皆さんの声を載せさせていただくという形にしようかと思っています。

○高川委員 顔写真が入るといいですけどもね。

○事務局 写真も載せて大丈夫だと答えてくださった方が半数くらいいらっしゃいます。

○小野委員 ネットワークではないですけども、講習をやった後、みんなで肩を組み合いながら全員で撮っている記念写真とかはあるのですか。

何が言いたいのかというと、わくわく感が必要だと思うのです。ここで仲間ができるのだというようなものが見えるといいのかなと思ったのです。

ただ座学で後ろからこうやっている写真があっても、多分つまらないのです。

○事務局 全員分の顔の掲載許可をいただけていないので、今回は掲載は難しいかと思うのですけれども、次回以降のために、次回の講座からはそういったところも気をつけながら写真に残せばいいかなと思っています。

○小野委員 広報で使いますのでということですね。

構成のデザイン例のところ、異論は私もないのですけれども、何か一つつけ加えたいな、アイデアがないかなと思って考えているのです。難しいかもしれないのですけれども、この基礎講座をちゃんと受けると、里山マイスターの称号がもらえますよとか、ブランディングにつながるようなものを考えたり、何かほかにないかな。

○高川委員 結局はブランディングだと思うのです。キャッチコピーとか、カラーセットとか、ステータスとか。

○野村座長 そうですね。

1 ページ目に実習風景と載っていますけれども、実習風景はスケジュールのところでもいいのかなと思って、表紙のところではこうなれますよという出口のイメージを出したほうがいいのかなと思ったのです。

それが、例えばみんなでわいわい楽しい集合写真みたいなものでもいいのですけれども、

そういうものであったり、生き生き活動している横顔であったり。

そうすると、こんなふうになりたいとか、こんなふうになれるんだというのがイメージで
きるのかなと思ったのです。

○高川委員 この受講の写真よりは、「里山へGO!」に来た人を相手にやられている指導者さ
んの写真がいいと思います。

○小野委員 よくあるような、指をさしながら、要するに指導者として活躍をしているよう
な写真ですね。

○高川委員 しかもギャラリーは若い人。

○小野委員 自分がああなれるんだというような、そういう写真のほうがいいのかもしませ
ん。

○高川委員 あればいいのですけれども、受講証明書を並べてみんなでここにこしている多
様な年齢層の写真とか多分ないですね。

多分、今の実習の広報素材からそれを探すのは現実的に難しいと思うので、「里山へGO!」
のほうか。

○柳川委員 受講修了書とかはあるのですか。

○事務局 出しています。

○高川委員 腕章とかはないですか。

ぱっと見て、その人が受講修了者だとわかるものはないのですか。

○事務局 今は、グッズはつくってないです。

○柳川委員 ちょっとしたピンバッジとか。

○小野委員 それがブランディングになるのです。

あれが欲しいから受けるという人も、中には出てくるのです。「あそこの講習を受けてる
の」みたいな。

○柳川委員 そのうち使えなくなるような消耗品ではなく、バッジとか洗わないもの。

○小野委員 缶バッジはあれですけれども、ピンバッジとかはいいと思います。

○高川委員 ピンバッジですね。

○柳川委員 修了証のすてきな感じの写真でもいいかもしれないです。

でも、バッジのほうがいいなと思う人は大分多いと思います。

○篠原委員 バッジは専門講習を全部終わったらとか。

○高川委員 あとは、このヘビーなのを30代から40代が受けられるかですね。

○柳川委員 あと、実際に社会人の方が受けるとなると、費用対効果を考えるのではないかなと思ひまして、載せられないかもしれませんが、名前を伏せて、前の資料で出していますね、森林インストラクター養成講習は3日で1万9000円とか。もし、この講習の時間が全て有意義だったとした場合、この講座はコストパフォーマンスがいいことになります。36時間もあって1万4400円とか、49時間も学べるのに2万4500円とか。

○高川委員 今のトータル時間で幾らというのはいいと思ひます。

○柳川委員 時間が長いことが受講の障壁となっているのかもしれないですけども、もし有意義だとして、この料金だったらとってもお得だと思ひます。

○松岡緑環境課長 そこは、考えさせていただきます。

○高川委員 活躍の場は基本的に、特別緑地保全地区でしたか。

○松岡緑環境課長 いや、保全地域と公園もあります。

○高川委員 里山公園。

○松岡緑環境課長 いや、都市公園。

○事務局 基本はどこでも、都内の緑地であれば。

○松岡緑環境課長 我々が所管しているところが保全地域ですので、どうしてもそこをメインでお話をさせていただいています。

○野村座長 2ページ目のほうには、配布先とか広報手段もありますけれども、この辺についてはどうでしょう。

○高川委員 ここが一番難しいですね。

資格系のサイトとかには、お金をかけてでも載せたほうがいいと思ひます。何でしたか、デューダでしたか。

ペルソナに合わせて広報媒体を選んだほうがいいと思うので、何か自己実現を探している人とか、副業を探している人とか、兼職の可能性を模索している人とか。

なかなかSNSは難しいです。何かいい案はありますか。

○篠原委員 広告でもかけない限り、結構大変です。

○小野委員 フェイスブックとかツイッターとかありますけれども、時系列で情報が垂れ流しなので、私もフェイスブックはやっていますけれども、結局、アーカイブで過去のあれを探したりなどはしないです。だから、一時的に見られるかもしれないですけども、それはお金がかからないからやってもいいのですけれどもね。

○高川委員 1回載せて最低で5,000円ぐらいです。ただ、それだとほとんど効果はないので、

ペルソナを区切って、それごとにもっと文言をブラッシュアップして10個ぐらいのパターンをつくってやるというのが普通のやり方だそうです。そのぐらいまでいって、初めてSNSが生きてくるらしいのです。

○柳川委員 この「広告手段（案）」の「紙媒体」で、「他局管轄ボランティアへのチラシ配布」の他局とは何ですか。

○事務局 「ボランティア団体への配布」で「保全地域活動団体」という、ここだけが環境局で普段かかわりがあるような団体になるのですけれども、それから下欄に掲げたものが環境局以外の局が所管しているようなボランティア団体で、そういったところにも案内をまいていこうかなと考えています。

○小野委員 いいと思います。

○柳川委員 あとは、緑地が好きではなくて、ボランティアが好きな人もいるので、JICAのボランティアのメーリスとかありますので、要するに、海外の緑地保全活動をしている人とかもそういうところにいるので、そういう人たちは意外と「今、あの国は治安情勢で行けなくなっちゃったんだよね」とか、JICAは都内に事務所がいっぱいあるので、そういう活動をしている人たちもいっぱいいるので、そういうところも出すといいのではないかなと思います。

○篠原委員 「環境らしんばん」みたいなポータルサイトが、環境に限らず結構いっぱいあります。

JICAだと、国際的な話が入ってこないと掲載が却下されてしまうので。

○柳川委員 そうなのですね。

○篠原委員 パートナーだと、多分。

○柳川委員 でも里山は国連のイニシアチブにも入っているのです、そもそも里山イニシアチブは国際的だと思うのです。

○篠原委員 そうなのです。そこをうまく内容を書けばいいと思います。

社協がやっているボランティアセンター的なところにも情報を探しに来る人は、結構高齢者かもしれないけれども、いるなど。

○高川委員 各地の市民活動センターとか。

あとは、NPOの運営のスキルアップを生業にしている中間支援組織があると思うのですけれども、そこにバーターですけれども、専門講座でチラシを置けるので、宣伝してくださいと言うと、NPOサポートセンターとか、あと何団体か。

○篠原委員 日本NPOセンターとか。

○高川委員 NPOセンターもそうですし、あと2カ所ぐらいあります。

○小野委員 それはチラシの配布先の「区市町村ボランティアセンター」というところが、そういうところですよ。

○高川委員 それは民間ですよ。

○野村座長 民間のNPOでやっている、中間支援的NPOですよ。

○小野委員 多分、ターゲット的には「里山へGO!」とうまくキャンペーンか何か組んだほうが、僕はいいのではないかと思いますけれどもね。

○野村座長 一番ぴったりくるのは、そうなのでしょうね。

○小野委員 情報は垂れ流しでヒットするのではなく、絶対に参加したい人はどこかに取りに来るのです。取りに来るといえるのは、取りに行くのと今回の基礎講習のところは、私は「里山へGO!」が一番ぴったりマッチングしていると思います。

逆に、「里山へGO!」の上のところにバナーか何か張ってもらおうとか、キャンペーンをやったほうが、「ああ、里山へGO!で言ってたけど、環境局でこの講座もやってるんだ」のほうが、僕は一番効果が高いかなと思います。

○高川委員 まさに、資料1の3ページ目ですね。

サポータージャーニーと僕らはよく言うのですけれども、こういう段階を追ってボランティアさんがレベルアップしていくという動線をつくってあげるというのが一番効果的です。

NACS-Jの自然観察指導員のフォローアップと位置づけられれば、都内の指導員1,500人か2,000人ぐらいの方にも情報を送ることはできます。

○野村座長 既に指導者。

○高川委員 年配の方は受けられている方も多いいと思います。でも、制度としては知られていない部類だと思うので、知らない人もいるのではないかな。

○野村座長 そうでしょうね。

幅がまだまだ広げられそうだとということで、広報についてはそのぐらいでよろしいでしょうか。

時間も近くなってきました。

一応、今回の次第にある「広報活動」についてまでは御意見をいただいたところです。これできょう予定の議事については終わりですけれども、よろしいでしょうか。

最後に何か、これだけは言いたいことがございましたら。

○柳川委員 タイトルがほぼ全てだと思います。

○野村座長 これがね、そうなのですよ。「指導者育成講座」というものをどこに持つてくるか。

東京都の事業としてそれはあるのでしょうかけれども、何か魅力的な、届く言葉が前に出たほうがいい気がします。

○松岡緑環境課長 わかりました。

○高川委員 タイトルが全てです。

○小野委員 副題を上にしてしまって、メインタイトルを下に置くという方法もある。

何かわくわく感のあるようなタイトルなのだけれども、括弧して正式名称を下側に置くというのも一つの方法です。部内で承諾がとれるかどうかはわかりませんが。

○高川委員 デザインなので、大丈夫ではないですか。

○野村座長 そのあたりも考えていただいてという御意見です。

それでは、議題はこれで終わりにさせていただきたいと思いますが、よろしいでしょうか。

ありがとうございました。

○松岡緑環境課長 野村座長、ありがとうございました。

今回で今年度分の指導者育成委員会は終了でございますけれども、また来年度もありますので、ぜひともよろしくお願ひしたいと思ひます。

本日はお忙しい中、まことにありがとうございました。